

地域発 防災ラジオドラマ 藤沢

六会天神町 地震災害 シナリオ 第3話

地震発生から一週間後 二〇一〇年一月二六日

自主防災組織の災害対策本部 天神町会館

時間 午後二時頃

気温 十三度 晴

課題 地域資源の活用・地域にあるボランティアとの連携

状況設定

被災から一週間後、被災地には全国各地からボランティアが到着しています。六会地区も被害程度は軽微ですが、市外からのボランティアと、地区に隣接する大学生のボランティアからの支援の申し出が来っています。

ボランティアによる災害救援の経験が無い人たちからは、色々支援を頼むことに不安を口にする人も出てきています。

地域のニーズにマッチしたボランティア活動が被災者への効果的な支援につながるので、天神町町内会長は、ボランティアと地域の被災者を上手に結び付けるには何をすればよいか役員や自主防災会の班員を天神町会館に招集して意見を聞くことにしました。

前説（ナレーション 毎回放送）

独立行政法人防災科学研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きに

して、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

藤沢市では、これまで藤沢市立鵠沼中学校を避難所とする地区防災連絡協議会の地震シナリオ、鵠沼海岸五丁目自治会自主防災会の水害シナリオを作成いたしました。今回は六会天神町での地震シナリオに基づくドラマを放送いたします。この地域は藤沢市のやや北部に位置する閑静な住宅地ですが、昼間は多くの方々が地区外に通勤通学されているため、高齢者の昼間独居が防災上の課題の一つになっています。

地域防災ラジオドラマ・イン・藤沢。六会天神町地震災害編。このドラマは地域住民の方々がワークショップで議論した内容に基づくフィクションです。

【ストーリー】

登場人物

石川会長	町内会と自主防災会の会長で避難所の総括責任者
岡田副会長	自主防災会の副会長
大山（女性）	自主防災会救出救護班 天神町会館勤務
河内（女性）	自主防災会救出救護班 天神町会館勤務
鍛冶山（女性）	町内会の会計
丸山（男性）	自主防災会消火班
中原（女性）	自主防災会給食給水班
和泉（女性）	自主防災会給食給水班
山田（女性）	自主防災会学童班

【ナレーション】

震災から一週間がたち、天神町も落ち着きを取りもどしてきました。被災地各地での復旧活動も軌道に乗り始めましたが、一方で被害の程度が大きい世帯や高齢者だけの世帯では、後片付けが思うように進まず、ばらつきが始めています。自治会長はブロック塀の片付けや家の中の整理など、外部ボランティアの支援も受け入れることを考えていますが、住民の中にはボランティアという存在が良くわからず、なんとなく不安だったり、遠慮しているのではないかと思われるふしがあります。そこで、災害時から町内の被災者に接してきた役員や自主防災関係者と相談して、ボランティアをもっと知ってもらい、利用してもらうことについて話し合いをすることになりました。

石川

「震災から一週間、ご自分の家庭も被災していらつしやるのに、町内のために尽力を尽くして活動していただきました皆さんには、本当にお礼を申し上げます。ありがとうございました。」

このたびの地震は、相模湾を震源地とした大型地震で、マグニチュード七・九だそうです。湘南一帯では地盤の悪い所を中心に壊滅的な被害が出ているそうです。藤沢市も駅前の繁華街をはじめとして南部を中心に相当の被害が出ています。正確な数字はまだわかりませんが、今朝のテレビでは、昨日現在で死者は千人を超えたようです。重軽傷者も相当の数になるでしょう。まだまだ被害は増えるかもしれません。皆さんご存知の通り天神町は引地川から一丁目のバス通り沿いが崩れて、倒壊はしないまでも建物に大きな被害がありました。今も十世帯が避難施設の小学校で生活しています、この会館も石段が壊れ仮設の階段で出入りしていますが、他の地域に比べて死亡者も無く軽傷者が十数人、火災はゼロで被害を最小限に抑えられたことは本当に良かったと思います。住民の地震に対する備えがあったことは、日ごろから防災の啓発活動に努めていただいた役員の方々の努力の賜物と感謝いたします。

さて、今日お集まりいただいたのは、いまだに後片付けが出来ないでいる高齢者だけの家や避難所生活をしている方々への支援が遅れていることです。しかし、これ以上皆様方に負担をおかけするわけにも行きませんので、ボランティアの要請をしたいと考えています。色々と心配する方もい

ることは承知しておりますが、効果的な支援が出来るよう皆さんで問題点を検討していただきたいと思い、お集まりいただいたわけです」

岡田 「確かに、復旧の遅れている方がいるのは確かですが、声をかけても「大丈夫です」と言われるので、詳しい状況が把握できてないんですよ」

大山 「遠慮しているんじゃないの」

河内 「そうよね、みんな程度の差はあるけど、被害を受けているんだもの、今は自分たちのことで精一杯なのよ」

鍛冶山 「私たちは役員だから、町内に気を配っているけど、それでも限界はあるわよね」

丸山 「妻は家の中の整理をしているものですから、今日は私だけしか出席できないで申し訳ない」

山田 「そんなこといわないで！槌田さんはご夫婦で、震災の日から二日も三日も一丁目の被災者の手伝いしていたじゃない、自分のところは後回しにして」

丸山 「それはどの役員さんも同じですよ」

石川 「役員の方々には本当にご苦勞をおかけしています。私もそうですが、皆さんもそれぞれにまだ何か出来るはずだ、という気持ちはもっていると思いますよ」

岡田 「人手が足りないんですよ、だから会長が言われるとおりボランティアアをお願いしますほうがいいです」

中原 「私、ボランティアのことはよく知らないんですけど、何処に頼むんです」

石川 「災害が起きると、市役所本庁舎にボランティア支援センターを設置するんだ」

和泉 「市役所の本庁舎まで行かなくちゃだめなんですか」

石川 「いや、地区の活動拠点として六会市民センターにも受付窓口が設置される」

中原 「そこに頼みに行けばいいんですよ」

岡田 「個人で頼むより、地域で被災者のニーズを把握して効率よく派遣してもらおうがいいんだ。ばらばらにいったんではなかなかね」

丸山 「まとめるとなると、支援に対する要望の交通整理が必要だな」

大山 「聞き取りするの？アンケートとか配って、回収するとか」

河内 「配ったり回収したりは大変よ。大体そんな時間が無いかも」

鍛冶山 「閲覧板で周知したら」

大山 「今、閲覧板なんか見てる暇ないんじゃない、普段だって回ってくるのが遅いんだもの」

中原 「聞き取り調査は誰がやるの」

河内 「支援を書いてもらう用紙を配るのは組長さんをお願いしたらどうかしら、自治会館に回収箱を置いておいて希望者が自分で用紙を入れるの」

大山 「どちらの調査方法でも遠慮して本当のことは書かないんじゃないかな」

丸山 「用紙に被害状況と家族構成を記入するようにすれば、ボランティアは要らないといっても、こちらで状況判断できるんじゃないか」

石川 「最近は個人情報とか言って、なかなか書かないんじゃないかな」

山田 「そういう人に聞き取り調査するのよ、届出方式じゃ出さない人の状況は判断できないわ」

中原 「地域の人たちに、そもそもボランティアの支援があるってことを知ってもらうことが大切じゃない」

和泉 「そうよね、支援の内容っていうか、メニューみたいなものをアンケート用紙と一緒に配ればいい」

鍛冶山 「ボランティアの人は専門家なんでしょ」

石川 「専門家もいるけど、学生や一般の人たちも大勢いる」

鍛冶山 「まるつきり知らない人が来るの」

中原 「それだと家財の片付けや身の回りの世話をしてもらうのは心配よね」

和泉 「そういえば何処だかの震災地で、片付けてやるって荷物をトラックで持っていった人がいたって聞いたことがあるわ」

河内 「ひどいわね、人の弱みに付け込んだ犯罪じゃない」

鍛冶山 「手伝いに来てくれた人に、気をつけなくちゃならないなんて、いやよね」

中原 「善意で来てくれるんだろうけど、やっぱり気を使っちゃうわよ」

和泉 「高齢者の世帯じゃなおさらよ、十時と三時にお茶を出さなきゃいけないなんて思っちゃうだろうし」

鍛冶山 「あれやって、これやって指図するなんて出来ないかもしれない」

山田 「悪いほうばかり考えてちゃだめよ、テレビで見た被災地のボランティア活動はとても喜ばれていたわよ」

中原 「テレビはいいとこばかり映すのよ」

和泉 「そう、食糧の配給をしたり、救援活動をしているとことか。でも・・・、ともかくボランティア活動の事が良くわかんないのよね」

大山 「ボランティアの組織のことを言っているの、それとも支援の内容のことなの」

和泉 「ボランティアっていう言葉は知っているけど、具体的に何処の誰が何をするのかってところがね」

石川 「全国から善意の人が支援に来てくれるんだ。藤沢市ではボランティア

センタを設置してそこに登録してもらう、そして資格や技術、力仕事や話し相手など、それぞれの得意分野で被災者の手助けをしてくれるんだ」

大山 「市がやっているんなら、何か身分証明書みたいなものがあるんでしょ」

石川 「いや、市がやっているったって、公務員じゃないんだから」

丸山 「地元の人が参加している支援組織はないんですか」

石川 「六会地区には、市と協力している藤沢災害ボランティアネットワークの災害救援ボランティアコーディネーター養成講座を受講した資格者がいて、外部からのボランティアと地域のニーズをうまく結び付けることになっているんだ。岡田さんもメンバーだよ」

岡田 「市が設置しているボランティア支援センターでは、受付・登録名簿を作成した上で被災者のニーズに合わせて人材を派遣しますから、身分の確認は出来るはずですよ」

河内 「じゃあ、心配ないわよね」

大山 「私たちは支援に来てくれた人たちを歓迎すればいいのよ」

和泉 「食事や飲み物は派遣を頼んだうちが出すの」

中原 「それだと大変よね」

鍛冶山 「その人たちの謝礼は、いくらぐらいかかるのかしら」

中原 「頼む仕事によるんじゃない」

和泉 「こんな時に個人で出せるお金なんか無いわよ」

山田 「アルバイトで来るわけじゃないんだから、食事なんかのことは支援センターかボランティアネットワークでやってくれるでしょ」

鍛冶山 「ボランティアネットワークっていうところには、自治会として賛助金か協力金みたいなものを払うんですか」

岡田 「そんなことはないよ、ボランティアは自分で食事は用意するし、ネットワークにお金を払う必要は無いんだ」

中原 「全て無料の勤労奉仕なんだ」

和泉 「古いわね、勤労奉仕なんて戦時中みたい。それじゃあ若い人が来るなら学徒動員ね（笑う）歳が分かっちゃうわよ」

石川 「アッそうだ、学徒動員だ」

和泉 「いやだあ、会長、学徒動員ですよ」

石川 「いやいや、日大のほうからね、「町内で必要なら学生を動員してお手伝いします」って言われたんだ」

中原 「それで学生動員なのね」

岡田 「いいじゃないですか、日大生なら地元だし」

大山 「学生寮や近所のアパートにいる子達は顔見知りが多いし」

丸山 「学生証で身分確認も出来る」

河内 「看護学校のほうにも話してみたらどうかしら」

鍛冶山 「そうよね、学校に避難している人たちやお年寄り、それに子供たちのケアをしてもらえたらいいわね」

和泉 「そうしたらその子たちの食事は、私たち給食給水班で炊き出しをやるわよ、ねえ中原さん」

中原 「そうよ、この会館に食べに来てもらえばいいのよ」

丸山 「学校と町内の交流もはかれるしな」

岡田 「会長、この話は進めてください」

石川 「わかった、早速大学のほうに話してみる」

鍛冶山 「そうなったら食料費は町内会から出していいですね」

石川 「もちろん、食費はかまわないだろう。しかし大学に話すには、具体的に何をしてもらうのかきちんと決めておかなければな」

岡田 「そうすると、最初の話に戻っちゃいますね」

丸山 「被災者のニーズの把握ですね」

石川 「そう、出来るだけ簡単にして現状が確認できればいい」

岡田 「思いつくままに項目を言ってみてください、このパソコンで調査用紙を作ってみますよ」

石川 「住所、氏名、電話も必要かな、それと家族の安否だな、けが人や病人、介護が必要か、手伝いを必要とするか、必要ならその内容。後は主な被害状況かな」

岡田 「（確認するような調子で）項目欄と記入欄に分けて、住所・氏名・電話は空欄。家族の安否欄は、全員無事・けが人病人はそれぞれ人数と症状を書く、要介護は人数と寝たきり・車椅子・その他に状態を書く、手伝いが必要かの欄は、必要と不要、どちらに該当してもその理由を内容欄に書く。記入欄の該当するものに○をつける。最後に主な被害状況、ブロック塀が倒れたとか瓦が落ちたなど・・・こんな感じですかね」

石川 「いいんじゃないかな、欄外に組長さんへ至急提出することって注意書きを入れてくれ」

河内 「知的障害者とか認知症とかの支援は？この間話し合ったじゃない」

大山 「書き込む人がいるかしら」

丸山 「必要ないんじゃないか、プライベートなことだよ」

河内 「でも、専門のボランティアをお願いするとき必要じゃない」

大山 「内容を見て個別に聞き取りしたらいいわよ、それからお願いするの」

河内 「そうかな、非常時なんだから早く情報がほしいんだよ」

石川 「非常時だからこそ出来るだけ個人情報を守ってあげたいんだ」

岡田 「そうですね、個人情報いらないでしょう。天神町の被害状況では、倒

れたブロック塀と壊れた家具なんかのごみ処理が主な仕事になるでしょうからね」

中原 「生ごみもよ、停電で冷蔵庫が止まっちゃったから中身を全部出したの。回収に来る回数が減っているからね」

和泉 「普段のときみたいに大きく開けちゃだめなのよ、少しあけてさっと出すの。冬場だから二日三日はもつわよ」

中原 「主婦の知恵ね」

石川 「ごみ処理といえば、粗大ごみなんかの仮集積場はどんなぐあいだい」

岡田 「震災の後は、みんな家の前に出していたんですが、道路が通れなくなるので、一丁目は丸山さんの裏のブロックにある空き地に、それと二丁目と三丁目の境にある畑に運んであります。いまでも各自で持ち込んできますが、市役所のほうで本格的なごみ処理が始まるまで、佐川工務店の協力で重機を使って整理しています」

石川 「じゃ乱雑にはなっていないんだね、地主さんや近所の人たちの迷惑になっではないからね」

丸山 「工務店さんは、震災直後から本当によくやってくれていますよ」

岡田 「燃料が続く限りフル活動だ、なんていつてましたからね」

石川 「災害が起きたときには、人も機材も地域にとって重要な資源だからな、感謝しなくちゃ。おや、もう三時過ぎか。岡田さん、調査用紙はそれでいいから急いで印刷して各組長に配ってくれないか」

岡田 「わかりました、全世帯に配布ですね」

石川 「そう町内全部だ。知らなかったというような人がいないようにしたいからね。皆さんも時間があるなら岡田さんに手を貸してやってくれないか」

山田 「いいわよ、何からはじめる」

大山 「私も手伝うわ」

河内 「近くの組長さんには取りに来てもらうよう電話するわ」

丸山 「すぐ出来るのかな、それなら一丁目の分は持っていくよ」

大山 「印刷できたら、組ごとに分けなきゃ」

河内 「手分けすれば早いわよ」

鍛冶山 「時間があるから私もやるわ」

岡田 「よし、プリントアウトできた。さあコピーするぞ」

皆ガタガタうごきだす。

石川 「ごくろうさん、私はこれから市民センターに行つて来る、その後小学校の避難所にいますから何かあつたら携帯に連絡してください。後は頼みましたよ」

河内 「ハイ、いつてらっしゃい」

コピー・裁断機で紙を切る音。枚数を数えたり、机の上でトントン紙をそろえる音などにぎやかになる
軽やかな感じの音楽が流れてくる

このドラマは住民はじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

● 六会天神町には、平時の連絡網として存在する自治会の班組織があります。またこれとは別に住民有志による自主防災組織が結成され、活動を行っています。また六会地区では各地区の防災組織が連帯して活動している六会防災リーダー会が結成されていることが地域の大きな特徴となっています。六会防災リーダー会は各町内の自主防災組織からメンバーが選抜されて六会地区全体の防災訓練や防災講習などの取り組みを行っており、実際の災害時には地域連携にも何らかのかかわりが出てくると思われるですが、今回のドラマは天神町という単一町内会での取り組みに絞ったものとしたため、六会防災リーダー連絡会の活動については描かれておりません。

● 第2話では高齢者を一時的に収容する施設として関係者が老人会館に詰めるというエピソードが語られますが、老人会館は実在の施設ではありません。また天神小学校に隣接するグリーンライフ湘南という特別養護老人ホームが登場します。こちらは実際に存在する施設で、ドラマの中で語られている通り六会地区の防災訓練にも参加され、人的交流が図られています。地域的には六会地区ではなく南側の善行地区に所属し

ます。災害時に地域の福祉施設と連携を図るために何をしておくべきかは、今後重要な課題として地域で検討されることになっています。

ストーリー3 終わり